

外国語コンテスト「日本語部門」は、日本語を母語としない者を対象に開かれています。という、募集対象者は何名ぐらいいるのでしょうか。名古屋校舎には、学部留学生、大学院留学生、協定留学生、合わせて200名を超える留学生が在籍しています。

上級レベルの学生が多いので、課題は、自作スピーチです。毎年「留学生の見た日本」という大テーマのもと、自らの体験を盛り込んで、身近な出来事から意見や考えを述べるのが課題です。

このコンテストの開催以来、日本語Ⅲの履修者は、全員参加となっています。つまり、学部留学生は1年次に全員参加となります。ただ、人数が60名余りと、全員が出場することは困難…そこで、1年生だけの予選を行い、4クラスの代表各2名、計8名が本選に進みました。そこに、2年生以上の学生や、協定留学生が加わり、本選メンバーとなります。今回は、協定日本語コースの留学生から申し込みがあり、2019年11月26日、9名で競うこととなりました。

審査は、教員4名（山本雅子・水木一恵・鈴木裕子・梅田康子）、過去にコンテストに出場経験のある学生審査員2名（国コミュ4年迫田篤志君、現中4年勝原杏衣さん）と、聴衆61名の投票によって行い、熱い空気の中、3名の入賞者が決定しました。

1位 張 震 (ZHANG ZHEN) 「いいよ、日本語」

Yes と No の両方に使われる「いいよ」を解釈する難しさについて、バイト先での経験をもとに考察しています。テーマこそ新しいものではありませんが、留学生にとっては今も昔も変わらぬ問題であると再認識させられます。そして、張君の生き生きとしたパフォーマンスが素晴らしく、聴衆のハートを射止めました。動画でお見せできないのが残念でなりません。

2位 陳 易辰 (CHEN, YI-CHERN) 「百面相の国」

四季の移ろい、年中行事…百面相のように様々な表情を見せる日本。それが単なる再現、再生産ではなく、「地味ハロウィン」のように、本来の趣旨から離れ、独特の変化を見せるところに日本の魅力を感じるという内容です。ユーモアとともに、日本文化に対する広い知識を見せてくれました。

3位 趙 昇俊 (CHO Seungjun) 「日本人の優しさ」

「優しさ」とは何かを追究した正統派スピーチ。これも新しいテーマではありませんが、人混みでぶつかったときに思わず出る言葉に、日本人の「優しさ」＝「配慮する心」だと感じた趙君は、観察するばかりでなく、やがて自分を振り返り、自らの行動を変えていきます。新しい発見が新しい自分を創るという留学の醍醐味に、聞き手の共感が集まりました。

また、惜しくも無冠の勝者となったみなさんは以下の方々です。

孫嘉璋「私にとって一番大切なもの」 張正陽「日本人の英語の発音について」

LEE EUNBI「私が眺めた日本」 景雪怡「身体障害者の障害を消すこと」

張 盼「お支払いから見た日本」 PHAM THI MINH THU「日本人のやさしさ」

どれも内容豊かで、イントネーション、間、アイコンタクト、ジェスチャーなど聴衆との言語的・非言語的コミュニケーションを念頭においた聞き手を納得させるものでした。

では、最後に一言。留学生の皆さん、外国語コンテストは1年生だけの行事ではありません。次回の挑戦を待っています！また、日本人学生のみなさん、コンテストに参加できませんが、ぜひ聴衆として留学生の声を聞きに来てください。